



この絵図は、前橋町を描いたもので上が南西の方角になっており、町別に色分けされています。大きさは縦243cm、横495cmで、大きな絵図です。原図は文政4年（1821）の作成ですが、右下の部分に明治5年（1872）別紙が貼付され、追加されています。この絵図には、文政4年に18の町名、明治5年に追加された部分には7の町名がそれぞれ書かれています。

前橋の城下町は、酒井家によって整備されました。金井宿（金井曲輪）や運雀町は以前から商人が住みついていたようで、元和年間には前橋領内の流通及び市場の拠点としての機能を果たしていました。城下は街道沿いに発達し、天和3年（1683）に16町でしたが、元禄14年（1701）には21町となっています。大手前には運雀町、その周辺には職人町である鍛冶町、白銀町が配置され、広瀬川右岸に沿って船屋町、板屋町、萱（屋）町が置かれました。しかし、前橋城は利根川の浸食によって崩壊の危機にさらされたため、明和4年（1767）松平家は本拠を川越城に移し、前橋には陣屋が置かれ前橋町も衰退します。

寛延2年（1749）酒井家に替わり、松平家が入城したときは武家屋敷1500軒・人口6000人、町家1200～1300軒・人口5000人、計1万1000人前後（推定）であったようです。寛政10年（1798）には、4502人（町人）を数えました。しかし以降は減少し、天保11年（1840）には3581人となって江戸時代最低となりましたが、周辺農村での養蚕業の発展が前橋町の生糸・繭市場の繁栄を促進し人口は再び増加しました。

〈参考資料〉『群馬県史』通史編4 78～81頁 『群馬県史』通史編5 491～512頁 『前橋市史』第3巻 1～227頁